

日本統治時代から現代までのアーケード付き街屋の変遷 —台北市迪化街を対象として—

Change of Machiya with arcade from Japan rule age to the present age
- Be targeted at Dihua street of Taipei -

○古恵菁¹, 大川三雄²

*Keisei Ko¹, Mitsuo Ohkawa²

Abstract: Located in an area known as Dadaocheng, Dihua Street became part of an early commercial center in the 1850s. Goods from China were shipped to the nearby port and traded for tea, sugar, and other local items. Since Dihua Street was close to the port, it became a major point for selling imported goods. When (1895-1945s) began for the rule era in Japan, trade with Japan increased rapidly. After the World War II, and three major local industry of the cloth business, miscellaneous goods business, Chinese medicine business developed in Dihua Street, and the industrial form of wholesale district distinctive current was formed.

1. はじめに

迪化街の建築と街道によって、19世紀末劉銘傳は台北を治める時、「街屋」^[1]という独特な建築の形態は成熟した。「街屋」の建築空間は河港商業形態と機能が符合するために発展していた。「街屋」建築が並び、「街屋」はユニットとして都市で生活機能の必要の「街道」になり、台湾伝統街区の原形になる。「アーケード」^[2]は通路に面する街屋建築の前面に主屋と一体化してつくられ、隣同士で連続することによって通路となる。「街屋」の一階では商業用、二階、三階では居住用の生活空間である。

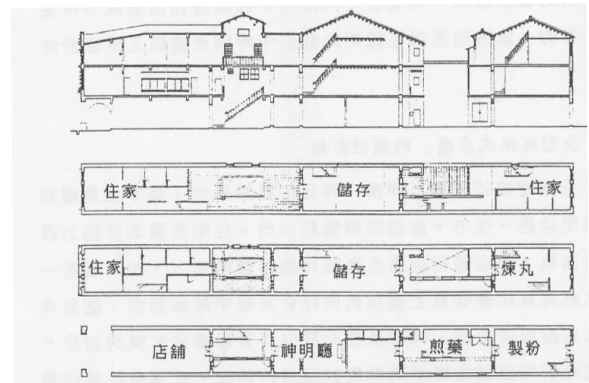
日本統治時代に「台湾家屋建築規則」(1900)の公布された以後、アーケードの幅、高さともに12mの軒庇のある歩道が定められている。これは台湾におけるアーケードの設置を義務づける始まりとなった。1936年(昭和11年)公布された台湾都市計画令の中で都市計画区域内での設置と詳細的に定められ、当時の法令が現在も沿用していることがある。また、台北市の都市発展のために、「信義計画区」の開発案を確定した後、迪化街をはじめ旧市街地は歴史の実際の教材になる。しかし1977年に、台湾内政部は許可された都市計画の中で、元々12mの迪化街道は20mに広げる予定した。もし当時その予定法案が通したら、今まで保存している迪化街の街屋は破壊する可能性がある。ついに、2000年2月公告した「容積移転」を中心に、「大稻埕風貌特定専用区」という都市計画法案が定められている。本研究は、時期によって、日本統治時代と現代の迪化街における街屋の法令、形態、使用者と法律執行者の考えを分析した後、日本統治時代と現代まで街屋の変遷を比較する。

2. 長い型連棟式街屋の分析

街屋は迪化街の都市地区の最も基本的な建物のユニットである。大稻埕の歴史発展の分析を見ると、このような建物のユニットは清朝から日治時期まで調整していた。一般的な長い型連棟式街屋の特徴を紹介し、この社会効能と意義の分析から明らかにしていく。

2-1. 長い型連棟式街屋の平面

長い型連棟式街屋は一つの建築の形態になるのは、基本的にはこの空間の機能で、住宅と店舗に加えて発展していた。初期の迪化街の街屋は簡単な加工や、店舗と住宅の機能である。特別には、漢方薬の店舗の産業の特性によって、空間の形式も変わっていた。具体例を挙げ、古い店乾元蔘薬房—住宅+店舗+仕事場。1930年代の末期、元々乾元蔘薬房の建築は単開の三進式の空間である。第一進の一階では店舗、二階と三階は住宅になる；第一進の後ろは帳簿の部屋と天井；第二進一階は祭壇、この後ろは見習いの大部屋；二つ目の天井は炊事場と漢方薬を乾燥する所；第三進の一階、二階と第二進の二階は漢方薬を作る場所と倉庫である。

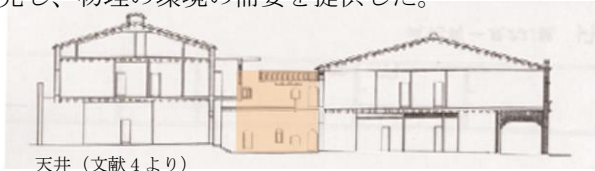


乾元蔘薬房 (文献4より)

1 : 日大理工・院 (前)・建築, Graduate Student, CST, Nihon-U 2 : 日大理工・教員・建築, Professor, CST, Nihon-U

2-2. 長い型連棟式街屋の断面

「台湾傳統長形連棟式店舖住宅之研究」(夏鑄九、1983)の中に、天井及び庭はこの建築タイプの効能は、「その組合せから関係して見に来て、商業と儀典の空間は極端な空間の天井に緩衝したことを商の混ざる衝突に居住する借り、そしてプライバシー関係を提供した。」実際にこの機能は見に来て、天井も空気を通して採光し、物理の環境の需要を提供した。

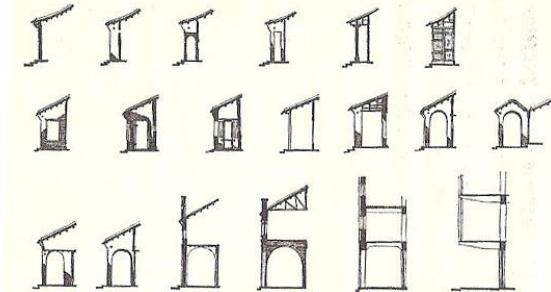


天井 (文献4より)

2-3. アーケード (亭仔脚)

アーケードには様々な生活行為が見られる。生活行為からアーケードが必要とされたものもあれば、それとは逆にアーケードがあったからこそ生まれ出た行為もある。基本的にはそこが日蔭で雨避けができ、車から隔離された歩行に安全なペDESTリアンであり、立話のできる場所であることだ。

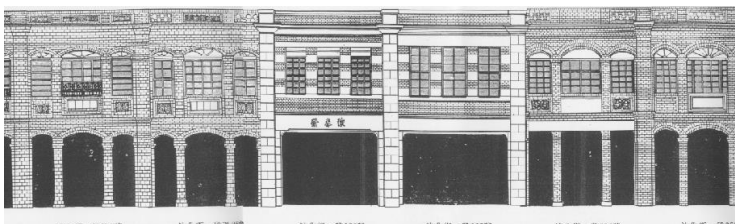
アーケードのデザインは建設年代によって寸法、構造などによりかなりな変化を見せている。アーケードの空間は各家の私用地であり、そこを開放することにより現行法規では 100 パーセントの建蔽率があたえられる。



アーケードの形態と詳細 (台北市大稻埕) (文献1より)

2-4. ファサード

現在の 迪化街における街屋建築のファサードは、多様なデザインにあふれている。1850 年頃の迪化街開発当初に建設された「ミンナン式」建築は積極的なファサードをもたなかったが、時代の変化に合わせ、それぞれの時代の流行を色濃く反映するようになる。



迪化街一段 356-366 号 (文献4より)

3. 街屋建築の様式と変遷

現地調査をした上でファサードを基準に以下の 5 グループに分類し、称呼を付ける (表 1)

「閩南 (ミンナン) 式」: 単層楼、瓦の覆う斜めな屋根と木の板で構成の扉と窓、装飾的なファサードをもたない。閩南地域から中国の伝統的な街屋建築の様式。

「倣洋楼式」: 洋風建築を真似し、建物の構造と配置は「閩南式」のまま、ファサードを洋風意匠で飾る。日本における看板建築に近い。

「洋楼式」: ファサードの意匠の構造 (煉瓦造) をふくめ全体に洋風建築を取りは入れた建築。

「バロック式」: バロック風の装飾を取りは入れた建築様式。洗出しと煉瓦の材料を主として、華麗な装飾を強調し、しっかり入念な草花の彫刻装飾。

「近代建築式」: 簡潔なデザインをもつ近代建築様式街屋建築の典型的なパターンは奥行きが長い敷地に三つの棟を配置する。各棟は「第一進」、「第二進」、「第三進」と呼ばれ、進と進の間に「天井」と呼ばれる中庭を設ける。

表 1 街屋建築の様式変遷表

	出現年代	構造	ファサード	主な分布地域
「ミンナン式」	1850 年代	木造、土角・煉瓦造	無	迪化街の中北部、中心部
「倣洋楼式」	1870 年代	木造、土角・煉瓦造	煉瓦・モルタルで仕上げ	迪化街の北部
「洋楼式」	1890 年代	煉瓦・RC 造補強	煉瓦・モルタルで仕上げ	迪化街の北部
「バロック式」	1900 年代	煉瓦・RC 造	モルタル・洗出し・タイルで仕上げ	迪化街の中心部、南部
「近代建築式」	1910 年代	RC 造	モルタル・洗出し・タイルで仕上げ	町並みに分散する

4. まとめ

特別な地理位置と歴史発展を通じて、大稻埕の空間形態を転化している。時期によって、迪化街における街屋も変化していた。研究文献を統括し、日本統治時代から現代までの街屋の形態が明らかにしていく。

参考文献

- [1] 郭中端、堀川憲二 (1980) 『中国人の街づくり』相模選書
 - [2] 夏鑄九 (1983) 「台湾傳統長形連棟式店舖住宅之研究」台湾大學土木工程學研究所
 - [3] 嚴忠賢、黃羅財 (1990) 「日據時期大稻埕店屋空間的文化形式分析」台湾大學城鄉所
 - [4] 夏鑄九等 (1989. 09) 「迪化街特定専用区現況調査及發展可行性研究」台北市政府工務局都市
- [注 1] 「街屋」台湾の街屋の形態は全島ほぼ共通している。街路の両側の家屋は互いに密着して隣家との共有壁の公壁をもち、あたかも棟割長屋のように連続している。街路に沿って建てられる住宅であるので、一般には「街屋」と呼ぶ。
- [注 2] 「アーケード」は東南アジア及び中国の東南沿岸や沿路の都市建築で普遍的に存在している。アーケードはかつて中国の移住する都市の歴史の背景のために反映する。